那須地域の野外レクリエーション利用の変遷に関する研究

永 嶋 正 信*

The Study for the Changes in the Field Recreational
Use in the Nasu Region

Masanobu NAGASHIMA

摘要：国道4号線、東北本線の開通、到達道路から域内道路の整備へと進展する。日光地域からの影響も受けつつ、那須地域を性格づける利用施設が形成されていった。自動車の進入は奥日光地域へ入るより早期であったが、域内車道の発達是比较的遅れていた。当初、湯治の利用からはじまり、1926（昭和元）年から観光目的の客が増加し、御用邸の新築、ゴルフ場の建設等が進められた。

利用の形態では当初、秋季の利用が首位を占めていたが、1964（昭和39）年以後25年間の平均値は、夏季が首位を占め以下、秋季、春季、冬季と続き、この状態は現在に及んでいる。地域振興の一つとして冬季の増加が、日光地域と共通の課題となっている。

1. 研究の動機及び目的

かねて「日光地域の野外レクリエーション利用の変遷」について研究を進めてきたが、新たに那須地域の利用について、日光地域と比較することによって、同一国立公園内の異なる地域での利用構造を明らかにし、今後の風景地の利用計画に役立てようとするものである。

(1) 研究方法及び対象期間

1868（明治元）年から1985（昭和60）年までの117年

間を対象に、地元新聞及び各種資料をもとに、年表を作成し、これから、表－1「那須地域の野外レクリエーション利用の傾向的分類表」を作成し更に表－2「那須地域の野外レクリエーション利用の時代区分表」を作成考察した。

(2) 対象区域

那須地域とは、栃木県那須郡那須町及び、黒磯市の一部で、現在、国立公園区域に包含されている範囲とする。

表－1 那須地域の野外レクリエーション利用の傾向的分類表

		ソ フ ト	ハ ー ド	
		・法 規・計 画・事 象	到 達 性	域 内 開 発
基 盤 整 備 期 （ 一 八 六 八 ～ 一 九 二 〇 ）	生活 基 盤 整 備 期 （ 一 八 六 八 ～ 一 九 二 〇 ）	<ul style="list-style-type: none"> ・1876（明9）明治天皇奥羽巡幸^{4) 8)} ・同 年 10. 有志那須野ヶ原開墾の必要⁹⁾ ・1880（明13）有志那須開墾社組織⁹⁾ ・1881（明14）7.1 那須岳燔^{9) 9)} 	<ul style="list-style-type: none"> 1884（明17）国道4号線開通⁴⁾ 1886（明19）東北本線黒磯駅まで開通¹⁾ 1887（明20）7. 上野－白河間開通⁹⁾ 	<ul style="list-style-type: none"> 1869（明2）三斗小屋温泉5軒営業¹⁰⁾ 1884（明17）9. 通称塩原道路（栃木－福島）開通⁹⁾ 1885（明18）9. 那須疏水全通⁴⁾ 1888（明21）秋 黒磯－湯本4里半砂利敷終了 地元有志⁵⁾ 1889（明22）3. 黒磯－湯本県道開通、同区間馬車営業開始^{1) 5)} 1890（明23）那須御料地に編入⁹⁾ 同 年 7.22 殺生石保存（有志）⁵⁾ 1893（明26）松方公爵那須郡に農場⁹⁾ 1894（明27）那須開墾社→松下矢板農場⁹⁾ 1904（明37）塩原御用邸設置⁹⁾ 1908（明41）西那須野－大田原間軌道開通⁹⁾ 1911（明44）三斗小屋温泉3軒営業となる¹⁰⁾
		<ul style="list-style-type: none"> ・1889（明22）町政施行 那須村、芦野町、伊王野村となる⁴⁾ ・1890（明23）7.25. 小松屋旅館新聞広告はじめ掲載⁵⁾ 		
		<ul style="list-style-type: none"> ・1909（明42）3.25 那須温泉場組合設立 那須八湯¹⁾ 	<ul style="list-style-type: none"> 1913（大2）自動車那須温泉に進入、翌年営業¹⁾ 	

*東京農業大学農学部

代 (二八六八〜一九四九)	時	観 光 的 注 目 点	<ul style="list-style-type: none">・ 1921 (大10) 6.25 国立公園調査 (塩原, 鬼怒川を含む主として日光地域)⁵⁾・ 1922 (大11) 1.13 前年調査の感想本多静六日光と那須温泉連絡の必要⁵⁾・ 1922 (大11) 7.9 那須の湯紹介記事⁵⁾	1915 (大4) 黒磯―湯本県道に編入 ⁴⁾	1915 (大4) 湯本内地に電燈つく ¹⁾ 1916 (大5) 4.乃木神社完成 ⁸⁾ (那須郡狩野村) 1918 (大7) 5.西那須野―黒羽約13km 東野鉄道開通
		観 光 整 備 初 期	<ul style="list-style-type: none">・ 1925 (大14) 那須スキークラブ組織⁵⁾・ 1926 (昭元) 観光目的の客増加¹⁾・ 1930 (昭5) 11.23 塩原国立公園期成町民懇親会⁵⁾・ 1931 (昭6) 1.1 我等が郷土の誇り当選決定⁵⁾・ 同 年 1.17 日光国立公園大宣伝方法打合せ, 県国立公園協会⁵⁾ (日光, 塩原, 那須, 栗山, 今市, 藤原, 足尾)・ 同 年 7.12 日光国立公園区域拡大要望民政党支部協議⁵⁾ <ul style="list-style-type: none">・ 1934 (昭9) 12.4 日光国立公園指定区域告示 (日光町, 今市町, 栗山村)・ 1936 (昭11) 3.29 栃木県観光地計画委員会並びに栃木県観光協会設置⁵⁾	1932 (昭7) 晩翠橋竣工 ¹⁾	1926 (昭元) 7.15 那須御用邸新設 ⁸⁾ 同 年 電話開通 ¹⁾ 同 年 個人別荘地増加 ^{1) 4)} 1927 (昭2) 近光荘結成 (別荘地開発組織) 1931 (昭6) 奥那須観光道路おだん茶屋まで ¹⁾
	公 立	国 立	<ul style="list-style-type: none">・ 1947 (昭22) 那須温泉観光協会設立^{1) 4)}・ 同 年 3.13 国立公園区域拡張期成同盟会結成⁵⁾・ 1947 (昭22) 6.3 区域拡張現地調査終了 (厚生省)⁵⁾・ 1948 (昭23) 12 日光国立公園地方委員会創立 区域拡張運動推進⁵⁾	1949 (昭24) 湯本―大丸間道路開通 ^{4) 5)} 同 年 10.10 那須―一日光特定直通バス開設 ⁵⁾	1947 (昭22) 山かご利用 (那須湯本―大丸―三斗小屋温泉) ¹⁰⁾ 同 年 御料林1,237町歩余となる ⁶⁾ 建築7,178㎡
		公 立	公 立	<ul style="list-style-type: none">・ 1950 (昭25) 9.22 日光国立公園区域拡張 (那須, 塩原, 鬼怒川その他) 指定^{4) 5)}・ 1950 (昭25) 10.11 観光地百選決定 那須高原 (平原の部2位)⁵⁾・ 1950 (昭25) 那須高原に道路公園 (県計画)⁵⁾・ 1951 (昭26) 1.12 那須スキー客正月景気⁵⁾・ 1952 (昭27) 今年度那須戦後最大の利用客・ 1953 (昭28) 10.24 那須岳小爆発⁹⁾・ 1954 (昭29) 11.那須町合併成立^{1) 4)}・ 同 年 1.25 那須積雪55cm 戦後最高⁵⁾・ 1955 (昭30) 8.2~27 両陛下那須滞在⁵⁾・ 1957 (昭32) 拡張分公園計画公示⁵⁾・ 同 年 7.4 那須高原開発計画策定 (県)⁵⁾	1952 (昭27) 6.那須―黒田原間定期バス開通 ¹⁾ 同 年 回遊道路計画施工 ^{1) 4)} 1953 (昭28) 県道黒磯―那須舗装着手1955年完成 ¹⁾

国 土 計 画 時 代 (一九五〇～一九七二)	自 然 風 景 地 開 発 実 施 期 (一九五八～一九七二)	<ul style="list-style-type: none"> ・1961(昭36) 10.7 湯本集团施設地区計画策定⁵⁾ ・同 年 2.4 那須高原スカイライン計画発表⁵⁾ ・同 年 9.20 日一那スカイライン国鉄系資本⁵⁾ ・1962(昭37) 4.12 塩那スカイライン予備調査⁵⁾ ・1963(昭38) 8.15 国際音楽祭開催15日間⁵⁾ ・1963(昭38) 7.28 塩那スカイライン(板室ー湯本12km)有料道路の方針⁵⁾ ・同 年 10.11 県四大観光地結ぶ有料道路計画発表6路線計130km⁵⁾ ・1966(昭41) 1.14 板室保養温泉として整備⁵⁾ ・同 年 7.那珂川県立自然公園指定⁵⁾ ・1967(昭42) 那須一甲子線来年から着手計画⁵⁾ ・1970(昭45) 県道路公社発足⁵⁾ ・同 年 4.栃木県はじめてTV観光宣伝⁵⁾ ・1970(昭45) 東北道開通に備え県内観光ルート整備計画樹立⁵⁾ ・同 年 1.19 那須、レクの場合(首都圏整備委)⁵⁾ ・1971(昭46) 8.22 首都圏自然歩道計画発表⁵⁾ ・同 年 10.23 奥鬼怒スーパー林道計画発表⁵⁾ ・1972(昭47) 2.12 奥の細道自然歩道整備計画⁵⁾ ・1972(昭47) 3.栃木県自然保護条例制定⁵⁾ ・1972(昭47) 3.那須の植物誌発行(生物学御研究所編)^{4) 6)} 	<p>同 年 5.6 安ヶ森森林道完工(栃木ー福島連絡)</p> <p>1962(昭37) 9.19 矢板ー八方ヶ原着手⁵⁾</p> <p>1964(昭39) 上野ー福島間電化複線開通¹⁾</p> <p>1965(昭40) 那須高原道路有料化(※ルキールハイウェイ) L=10.3km^{1) 4)}</p> <p>1968(昭43) 塩那スカイラインー部開通 L=7.4km¹⁾</p> <p>同 年 大沢ー八幡線開通 L=6,652m⁴⁾</p> <p>1971(昭46) 10.21 塩那スカイライン貫通⁵⁾</p> <p>1972(昭47) 10.那須一甲子線開通 12.1km⁵⁾</p>	<p>1961(昭36) 町営スキー場リフト完成⁴⁾ L=280</p> <p>1962(昭37) 10.19 那須岳ロープウエー完成^{1) 4)} 郡公平ー那須岳間 L=750M, 標高差=282M 同 年 那須国際C. Cオープン 18ホール^{4) 5)}</p> <p>1963(昭38) 12.10 大丸園地整備⁵⁾</p> <p>1964(昭39) 循環道路有料道路として整備⁵⁾</p> <p>1965(昭40) リンドウ湖オープン(農業用温水溜池周辺開発)⁴⁾</p> <p>同 年 那須宅造ブームの傾向⁵⁾</p> <p>同 年(昭40ー42) 大丸園地国補整備⁴⁾</p> <p>1967(昭42) 7.13 那須ホテル収容力計1万人以上⁵⁾</p> <p>同 年 12.18 年末年始客予約殺到⁵⁾</p> <p>1968(昭43) ロイヤルセンターオープン⁴⁾</p> <p>同 年 町営スキー場第2リフト完成(L=400)⁴⁾</p> <p>同 年 12.15 東野鉄道廃止(50年間)⁵⁾</p> <p>1969(昭44) 7.7 那須高原キャンプ場建設⁵⁾</p> <p>1970(昭45) 町営スキー場ヒュッテ竣工^{1) 4)}</p>
---	---	--	---	--

		ソ フ ト	ハ ー ド	
		・法 規・計 画・事 象	到 達 性	域 内 開 発
現 代 利 用 制 御 時 代 (一九七三～一九八五)	自 然 保 護 重 視 期 (一九七三～一九八五)	<ul style="list-style-type: none"> ・1973(昭48) 2.5 県内ゴルフ場建設ラッシュ新設84所⁵⁾ ・1973(昭48) 3.29 栃木県ゴルフ場規制基準設ける⁵⁾ ・1973(昭48) 4.1 自然保護地区指定開始⁵⁾ ・1973(昭48) 7.5 栃木県自然環境保全調査図面化⁵⁾ ・同 年7.14日光太郎杉控訴棄却東京高裁^{4) 5)} ・1973(昭48) 10.27 日光国立公園計画見直し開始 ・1974(昭49) 観光客248万人に達す ・同 年 2.11 塩那道路繰り直し昭和55年開通困難、工費96億円となる⁵⁾ ・同 年6.6 栃木県政自然保護対策を重点に ・1975(昭50) 7.17 ゴルフ場適正化検討 	<p>1973(昭48) 4.23 霧降高原有料道路認可⁵⁾</p> <p>1974(昭49) 12.20 東北自動車道開通矢板ー白河間49.5km^{4) 5)}</p> <p>1978(昭53) 9.1 那須一甲子道路供用開始 L=12.1km(栃木6.7km, 福島5.4km)⁴⁾</p> <p>1982(昭57) 6.東北新幹線開通⁵⁾</p> <p>1985(昭60) 3.東北新幹線上野乗入れ(宇都宮ー上野間44分)⁵⁾</p>	<p>1973(昭48) 那須国民休暇村開設⁴⁾</p> <p>1974(昭49) 沼原ダム発電開始⁴⁾</p> <p>同 年 観光客248万人に達す(泊105万人)</p> <p>1975(昭50) 別荘地分譲活発化^{4) 5)}</p> <p>同 年 2.10 那須旅館不振保養所寮が多いため⁵⁾</p>

表-2 「那須地域の野外レクリエーション利用の時代区分表」

期 間	時 代 別	期 別 (傾 向)		特 記 事 項	
1868～1949 (明元～昭24)	基盤整備時代	1868～1920 (明元～大9)	生活基盤整備期	鉄道、道路開通、開墾	
		1921～1924 (大10～大13)	観光的注目期	全国的国立公園調査	
		1925～1949 (大14～昭24)	観光整備初期	1925～1946 (大14～昭21)	国立公園意識 後半戦時下
				1947～1949 (昭22～昭24)	国立公園指定 運動開始
1950～1972 (昭25～昭47)	国立公園化時代	1950～1957 (昭25～昭32)	自然風景地計画期	国立公園指定、諸計画集中進捗	
		1958～1972 (昭33～昭47)	自然風景地開発実施期	①到達施設、②域内道路、③域内開発(別荘分譲、集団施設地区計画、園地整備)、④冬季施設	
1973～1985 (昭48～昭60)	現代利用制御時代	1973～1985 (昭48～昭60)	自然保護重視期	公園計画見直し、到達道路継続	

(1990・永嶋)

2 考 察

(1) レクリエーション利用の変遷

〔基盤整備時代〕1868～1949(明治元～昭和24)年

1868～1920(明治元～大正9)年 明治初年は軍隊の移動、農民騒動がみられ、1876(明治9)年、明治天皇奥羽巡幸までは、社会の不穏な状況が続いていたが、次第に平静となり、原野の開墾団体が組織され、道路、鉄道の開通、自動車の進入による到達性の改善と、近代化が図られて、生活基盤が整備されたが、遠方からの観光利用は目立たず、周辺農家の湯治利用が主対象であった。1890(明治23)年、旅館の広告が地元下野新聞に、はじめて掲載された。1920(大正9)年の那須湯本宿泊客数によれば、周辺地域在住者の湯治利用が多く、8月に入込みが主体であった。総括的にみると生活基盤整備の範囲内にとどまっていた期間で野外レクリエーションの兆しは見られない。

1921～1924(大正10～大正13)年 1921(大正10)年6月、国立公園の現地調査(主として日光地域)が開始され、その感想として、本多静六から日光と那須温泉の連絡計画の必要性の発表があり、それによって次第に那須地域が紹介されはじめた。1923(大正12)年、新那須地区に温泉を引き開業した。

1925～1949(大正14～昭和24)年 この間を戦時下の中断によって国立公園指定運動に戦前、戦後に差異が認められるため下記の期間に細分した。

(i) 1925～1946(大正14～昭和21)年 那須御料地は、1890(明治23)年314.61haが編入されたが、御用邸が新築されたのは1926(大正15)年7月15日に至ってからであり、昭和天皇が那須で植物採集をはじめられたのは、「那須の植物」によると1926(大正15)年8月か

であった。1925(大正14)年那須スキークラブの組織など、観光地として注目されはじめ観光目的の客の増加となつて地元を刺激しそれが次期の施設整備にもつながっている。

観光目的の客の増加と、国立公園運動への呼びかけによって次第に意識が昂揚したようだが、1931(昭和6)年2月、国立公園法案が、上程可決されると更に関心が高まり、同年7月栃木県民政党が、那須地域までを含め日光国立公園区域の拡大を求める動きがあった。

1934(昭和9)年12月、日光国立公園(栃木県内は当時、日光町、今市町及び栗山村の一部)が指定告示された。

1936(昭和11)年7月、那須ゴルフ倶楽部²⁾〔1959(昭和34)年8月1日社団法人認可〕が、3年間の工事の後竣工し、那須地域を特色づける施設となった。

1937(昭和12)年から、日華事変突入と同時に、戦時色が濃厚となり、レクリエーションのうごきが乏しくなる。

(ii) 1947～1949(昭和22～24)年 1947(昭和22)年には、那須温泉観光協会が設立、国立公園区域拡張期成同盟会が結成され、厚生省による現地調査が、終了するなど態勢が固まった。1949(昭和24)年湯本～大丸間の道路が開通し、域内開発が進むなど短期間であるが、国立公園指定へ向けての運動が着実に進行した。

〔国立公園化時代〕1950～1972(昭和25～47)年

1950(昭和25)年9月22日、那須地域は塩原、鬼怒川その他の地域とともに、国立公園の指定を受けた。脚光をあびた那須地域を中心に、次第に増加する利用客に対処する計画が取上げられた。即ち黒田原方面への道路、

また域内回遊道路の計画等が進む。1955（昭和30）年8月以降、両陛下の那須御用邸のご滞在が長く、毎年の恒例となり那須を性格づけている。1957（昭和32）年に、国立公園計画公示となるなど、1950～1957（昭和25～32）年の間は、日光国立公園区域に編入されその進展が図られた。

1958～1972（昭和33～47）年 道路をはじめ各種施設の建設が集中する14年間であった。その結果、那須地域の宿泊施設の収容定員は、1万人を越え、自然風景地の利用について充実した時期となった。1972（昭和47）年10月、福島県の呼びかけによる甲子温泉との連絡道路12.1kmが開通、これが1978（昭和53）年9月に有料化の上、併用開始となり山岳観光道路として沿線開発も進められた。

自然風景地に各種公共事業費が投入され、具体的に進む自然風景地開発実施期となった。

〔現代利用制御時代〕1973～1985（昭和48～60）年

1973（昭和48）年10月、OPEC石油戦略実施以後、開発計画が抑制され、自然保護へ社会的要求が高まるにつれ、既に着手した大規模の塩那道路（塩原～板室間）は着手後、完成までに練り直しが起り、道路併用開始が困難となり、自然破壊として問題化する。その他到達道路、域内開発事業などが引き続き継続するが、各地で手控えがみられる自然保護が重視される時期を迎え、反面利用が下降した時期となっていた。

（2）入込客数の変化

入込客の実態を把握して地域特性を知ることが適切な基本的利用施設計画樹立の資料として必要なもので、その内容は、入込客総数の変化、四季別利用状況、季節別集中度等であり以下に記す。

入込客数は、1952（昭和27）年以後の記録によると、表-3のとおりで、1973（昭和48）年まで逐年上昇の一途を辿っており、それまでの最高の280万人となっていたが、同年10月いわゆる石油危機を迎え、この年を境とし、翌年から急激な減少が認められた。その後、5ヶ年を経過した1979（昭和54）年からは増加に転じ、300万人台を超え、入込客数の上では完全に復調がみられたが、敢えて後遺症とみられるものを挙げるならば、1974（昭和49）年以後、屢々前年より減少する年が出現するようになったことである。入込客数の減少について、日光地域との比較を挙げれば、日光地域は石油戦略に起因すると思われる減少は、1988（昭和63）年に至るも回復がみられていない。

四季別利用 元来、典型的湯治場の利用と性格づけられるものに、1922（大正11）年12月10日付、地元下野新聞に1920（大正9）年の那須湯本宿泊客154,141名及び、

黒磯駅下車客数127,842名であり、この四季別の比率と順位は、黒磯駅下車客では、①春季28.2% ②夏季26.5% ③秋季25.5% ④冬季19.8%となっている。那須湯本宿泊客では、①夏季59.6% ②秋季20.6% ③春季17.6%

④冬季2.2%となっており、宿泊客は約60%が夏季の利用で、秋季、春季がこれに続き、冬季の利用は僅かであった。この当時は、黒磯駅の下車客より、那須湯本宿泊客総数が多く、周辺農村からの利用者が、湯治のための利用が群を抜いており、湯治型の利用であったことが認められた。

連続的利用者統計のある1952（昭和27）年からの四季別利用状況の延35年間の四季別利用構造の平均値は、春季21.6%、夏季33.7%、秋季32.9%、冬季11.8% となっている。昭和30年代の夏季、秋季の利用は、その多寡が年によって激しく異なるが、次第に落ち着き、1952（昭和27）年から1963（昭和38）年まではほぼ①秋季、②夏季、③春季、④冬季の順となっていたが、1964（昭和39）年から夏季の利用が増加し、夏季、秋季、春季、冬季の順となりこの利用型式は、1973（昭和48）年以降の現在まで変らない。これは日光地域とほぼ同型で、四季別利用構造図-1によると、特有の三角形を示している。那須地域は35年間の平均値を示し、参考の日光地域は29年間の平均値を使用する。

季節別集中度 1952（昭和27）年から1988（昭和63）年までの間における各季節別にみた、集中度の最高値の年は次のとおりである。

- ① 秋季46.3%は1954（昭和29）年で、この年は入込客総数は、25万人台と少い時期であった。
- ② 夏季39.6%は、1982（昭和57）年で入込客総数は、前年対比減が続いた年であるが、総数は300万人台の年である。
- ③ 春季25.7%は、1957（昭和32）年で、この年は前後に総入込客の前年比10%以上と伸び率の高い年が連続していた。総入込客数は、40万人台であり、この年内のみで比較すれば、夏、秋季につぐ位置を示している。
- ④ 冬季では、19.6%1964（昭和39）年で、この年は天狗の鼻にスキーリフトが完成し、町営那須岳スキー場が、開設後、3年を経過していた年で春季の利用は20.3%で、冬季との率に大差が認められない年であった。

むすび

那須地域の野外レクリエーション利用は、湯治型式にはじまり、国立公園指定運動に際しては、表-1によって当初自主的な活動より他地域からの影響によって進められることが認められたが、鉄道の開通から到達道路の

表-3 那須地域利用者総数並びに四季別構造

年別	項目	利用者数	前年比	四季別比率(%)			
				春季	夏季	秋季	冬季
1952 (S.27)		175,116	—	21.9	30.2	30.3	—
1953 (S.28)		197,183	11.3	19.1	30.3	36.1	14.5
1954 (S.29)		251,450	12.8	10.3	33.1	46.3	10.3
1955 (S.30)		283,774	11.3	22.2	32.8	32.2	12.8
1956 (S.31)		331,028	11.7	22.4	32.1	33.3	12.2
1957 (S.32)		403,030	12.2	25.7	34.1	31.3	8.9
1958 (S.33)		431,003	10.7	23.1	33.7	30.9	12.3
1959 (S.34)		490,782	11.4	—	—	—	—
1960 (S.35)		644,715	13.1	23.0	28.4	33.9	14.7
1961 (S.36)		841,330	13.0	22.9	29.2	34.9	13.0
1962 (S.37)		940,224	11.1	22.4	28.6	35.8	13.2
1963 (S.38)		1,044,655	11.1	22.5	28.5	35.9	13.1
1964 (S.39)		1,414,042	13.5	20.3	33.2	26.9	19.6
1965 (S.40)		2,145,862	15.2	22.2	31.3	29.5	17.0
1966 (S.41)		2,315,259	10.8	21.7	34.3	33.4	10.6
1967 (S.42)		2,395,509	10.3	21.3	36.5	30.9	11.3
1968 (S.43)		2,468,559	10.3	21.4	35.9	31.4	11.3
1969 (S.44)		2,591,600	10.5	20.8	36.5	36.9	9.8
1970 (S.45)		2,660,430	10.3	22.7	33.7	31.3	12.3
1971 (S.46)		2,705,595	10.2	21.9	35.6	31.3	11.2
1972 (S.47)		2,746,493	10.1	22.5	34.5	31.8	11.2
1973 (S.48)		2,810,029	10.2	21.2	32.8	30.9	15.1
1974 (S.49)		2,486,584	△8.8	21.5	36.1	30.5	11.9
1975 (S.50)		2,538,711	10.2	20.4	37.9	31.7	10.0
1976 (S.51)		2,566,289	10.1	21.8	38.1	29.7	10.4
1977 (S.52)		2,395,863	△9.3	21.7	37.2	31.2	9.9
1978 (S.53)		2,748,997	11.4	18.3	37.4	35.6	8.7
1979 (S.54)		3,141,460	11.4	19.8	39.1	31.7	9.4
1980 (S.55)		3,115,289	△9.9	20.0	39.1	31.5	9.4
1981 (S.56)		3,071,177	△9.8	22.9	38.7	31.0	7.4
1982 (S.57)		3,055,438	△9.9	22.3	39.6	30.8	7.3
1983 (S.58)		3,106,783	10.1	23.9	36.8	29.9	9.4
1984 (S.59)		3,295,207	10.6	19.9	38.8	33.2	8.1
1985 (S.60)		3,393,907	10.2	21.8	38.7	31.3	8.2
1986 (S.61)		3,567,761	10.5	20.7	39.1	32.1	8.1
1987 (S.62)		3,854,014	10.8	21.8	38.0	32.7	7.5
1988 (S.63)		3,724,977	△9.6	23.7	38.4	29.3	8.6
以上35年間の平均値				21.6	33.7	32.9	11.8

註① 1959 (S.34)年四季別比率は不明
 ② 那須町役場, 栃木県観光主管課調

(1990・永嶋)

図-1 四季別利用構造図

(1990・永嶋)

整備へと発展するうち、同県内の日光地域の国立公園調査によって地元意識が高まり、御用邸の新築に加えて、

Summary: The opening of the national road No.4 and the Tohoku Main Line resulted in the improvement of the roads in Nasu. Various facilities were constructed.

They were partly influenced by Nikko, but on the other hand, they had their own characteristics of the Nasu region. Automobiles started to enter into the area earlier than Okunikko. However the progress of roadways were relatively slow. First, people visited Nasu for hot spring cure. Then, after 1926 (Showa 1), tourists for sightseeing have increased. The imperial villa was constructed and golf courses were opened.

At first, autumn was the top season in the number of visitors. However examining the average in the 25 years after 1964 (Showa 39), summer was the top and it was followed by autumn, spring and winter. This order has not changed yet.

Increase in the number of visitors in winter is the future task for the local development of the area as same as the Nikko region.

ゴルフ場の設置によって地域の性格づけができ上っていった。それと同時に観光目的の客の増加が顕在化してきた。日光地域の国立公園の指定で更に刺激を受けるが、戦時下のため主体的な利用の推進が図られるようになったのは、1947 (昭和22) 年以降となった。

入込客数は現在の受入施設の利用状況から、現在の300万人台を越すためには、更に新しい拠点開発と、冬季の利用を伸ばし、地域の利用型式の三季型から四季型に近づけることが、解決の方策となるものである。更に那須町政の中でも意識改革が求められるが、それは那須町の行政区域が東西に長く、東部に農村部、西部に山岳の観光地を包含しているためである。1950 (昭和25) 年山岳部に当る地域が国立公園区域に編入されて以来、那須町の観光事業が本格化の時代を迎えているが、町政の立場からは片寄った山岳部に観光資源を擁し、これに対して国庫補助を含む、諸事業が集中的に行われていた。平野部に農村を持つことになり、この両者の調整が必要で、画期的な観光事業を進めるための障害となって常に立ちはだかる町内事情となっている。OPEC石油戦略の影響による入込客の減少の回復は、日光地域に比して早期であったことが認められた。

文献 (引用・参考)

- 1) 日本観光協会(1976年5月): 観光地の発展構造
- 2) 那須ゴルフ倶楽部(1986年12月): 那須ゴルフ倶楽部50年史: 同機関誌「那須」No.8及びNo.52
- 3) 国立公園協会(1951年10月): 日本の国立公園
- 4) 行政資料 (栃木県, 那須町)
- 5) 下野新聞 (1878~1985) の関係紙1,500枚
- 6) 宮内庁行政資料
- 7) 永嶋正信(1988): 日光地域の野外レクリエーション利用の変遷に関する研究
- 8) 下野新聞社(1978年10月): 年表栃木県のあゆみ
- 9) 宇都宮地方気象台編(1963年3月): 栃木県の気象
- 10) 三斗小屋温泉誌刊行委員会(1989年12月): 三斗小屋温泉誌
- 11) 生物学御研究所(1962年5月): 那須の植物: 三省堂